

# 日本語動詞の多義を支える構造

—「はたく」を例に—

中山 健 一

## 要 旨

本稿は、日本語の動詞「はたく」の多義を分析・記述する。多義語の意味を記述するための枠組みとして、主に、奥田靖雄が提唱した「連語論」を採用したうえで、現代語の実例調査、通時的な実例調査を行なった。その結果、①歴史的には<対象変化>の意味が最も古い、現代では廃れたこと、②現代語の「はたく」の多義の体系において<接触・打撃>が基本義であり「自由な意味」(奥田1967)であること、③「連語の構造にしばられた意味」(奥田 前掲)として<除去>と<付着>があり、これらの派生義が生まれたことは連語の構造から説明できること、④「文のなかではたす機能にしばられた意味」(奥田 前掲)として<(金を)使い果たす>があり、この派生義は<接触・打撃>の「はたく」の換喩的使用から生まれたことを明らかにした。

キーワード 動詞「はたく」 多義語 多義 奥田靖雄 連語論 連語の構造

## 1. 目的

複数の意味をもつ単語は「多義語」と呼ばれ、多義語がもつそれぞれの意味を記述することは、日本語研究においてきわめて重要な課題である。これまで多くの論考が出されており、また、国語辞典の語釈も含めれば、非常に多くの蓄積があり、ある程度解明されていると言える。

一方で、たとえば同じ単語(多義語)について、複数の国語辞典の語釈を比較したとき、意味の立て方、語釈に違いが見られることからわかるように、多義語の意味の記述は論者によって異なり、なぜ、そのような意味の立て方をするのか、根拠がわかりにくいことがある。また、1つの多義語の意味どうしのつながりが明確でないことも多い。

本稿では、多義語の意味を記述するための枠組みとして、主に、奥田靖雄が提唱した「連語論」を採用し、この枠組みが多義語の意味の記述においてきわめて有効であることを示す。

具体的に分析する多義語は「はたく」である。この単語を選んだ理由は、①日常的に頻繁に使用される和語の基本単語であること、②先行研究が少なくその意味が十分に分析さ

れていないこと、③成立が比較的最近で、通時的な意味変化が追いやすいこと、以上の3つである。

以下、2.1節で動詞「はたく」の意味記述の先行研究をまとめ、未解明の事柄を明確する。2.2節で、本稿の依拠する奥田の「連語論」について、本稿に直接かかわる点に絞ってまとめる。3節で事例分析の方法を述べたのち、4節で動詞「はたく」の意味の現代語の調査、5節で通時的な調査を行なう。

## 2. 先行研究

### 2.1 動詞「はたく」の意味記述

動詞「はたく」の多義の論考は多くなく、管見の限り、佐藤(2018)、中道(2019)の2つである。佐藤(2018)は、「はたく」の多義を、コーパス(国立国語研究所BCCWJ)による調査、インフォーマントへのアンケート調査にもとづき分析している。調査に先立ち、国語辞典の語釈では主に、「たたく、うつ」(=<打撃>、例:平手で頬をはたく)、「払い除く、払いのける」(=<除去>、例:はたきでほこりをはたく)、そして、慣用的表現として「使い果たす」(例:大金をはたく)、相撲の技としての意味が挙げられているとする。事例調査の結果、国語辞典で従来指摘されている意味に加えて<付着>の意味があるとする。以下、佐藤(2018)に挙げられている例である。また、この例は、4節で詳しく述べる通り、本稿の筆者の事例分析でも確認できた<sup>1</sup>。

(1)「まあ、ぼうや、」と、髪に粉をはたいた王女様はいいました。「あなた、ほんとにわけをご存じないの?なぜかというとね、(BCCWJ「フランダースの犬」、佐藤2018)

佐藤(2018)の調査をふまえて、中道(2019)では、「はたく」の3つの多義の関係について次の2点を主張する。まず、<付着>と<除去>という相反する多義をもつことについて、<付着>、<除去>の対象は「粉類」が多いという点で共通するが、「<付着>と<除去>は、反対方向の意味である。そのような反対方向の意味は、粉がよぶんなものであるか必要なものであるかという文脈の違いによって最終的に実現されていると言える」(中道2019:18、下線は引用者)と結論づけている。次に、<打撃>について、佐藤(2018)の調査では、実例数で<除去>が最も多いこと<sup>2</sup>、インフォーマント調査で<打撃>の意味では動詞「たたく」を選択する話者が多いことから、<打撃>の意味は「この語の第一義的な意味とは言えないと判断できる」と結論づけている(中道2019:19、下線は引用者)。

本稿4節の調査においても、現代語の「はたく」の多義の大枠については、おおむね佐藤(2018)と同様の結果が得られている。しかし、佐藤(2018)の調査、および、それをふまえた中道(2019)の考察においては、次の3点が十分に明らかになっていない。

- 1 佐藤(2018)と本稿の4節は同じコーパスを使用している。しかし、事例抽出方法に違いがあるため、事例は完全には一致しない。佐藤論文の揚げ足をとる意図はないが、検索条件の設定(p.86)の不備から網羅的な収集となっていない点で、やや問題がある。
- 2 この点、先の脚注で述べたように、そもそも事例収集の方法に問題があるため、再検討の余地がある。

#### <あ>多義を支える言語的な条件

実例分析から多義的な意味を見いだす際、その言語的根拠、多義を支える言語的な条件を明確にすべきだが、先行研究ではそれが十分示されていない。中道（2019）ではある程度、多義が実現する言語的条件を「文型」というかたちで示しているが、前述の通り、特に<除去>か<附着>のいずれの意味になるかは「文脈の違いによって最終的に実現されていると言える」（中道2019：同上）とする。また、この引用部分「文脈」に付けられた注には、「言語的なものと場面的なもの両方を含む」とあり、その単語がもつ語彙・文法的な性質と、個別の一回限りのコミュニケーション場面における使用とが、十分に区別されていないように思われる。

#### <い>3つの意味の関係

中道（2019）は、「現象素」という考え方を提唱した国広（1994）を引用し、多義語「とる」は<把握>、<獲得>、<離脱または除去>の多義をもつが、3つの意味に共通する抽象的なレベルで「とる」という動作の動き（「現象素」）を設定することができ、その「現象素」が様々な文脈において実現することで、3つの意味が生まれてくると説明する。そして、「はたく」の3つの意味も、同様の方法で説明する。たしかに興味深い論ではあるが、しかし、「はたく」の3つの意味の関係については、十分な説明ができないように思われる。また、前述の通り、中道（2019）は、<打撃>の意味は「この語の第一義的な意味とは言えない」（中道2019：同上）とするが、この点も再検討の余地がある。

#### <う>通時的な変化の過程

単語が複数の意味を持つのは、歴史的な意味変化の結果である。したがって、現代語のある単語の多義を解明する場合、通時的な変化の過程の調査が、基本義と派生義の区別や、多義どうしのかかわりあいを見いだす手がかりになる。また、この点にかかわって、須田（2005）は、2.2節で述べる奥田の「連語論」について、「そこ（引用者注＝連語論）には、現代語の研究でありながら、歴史性が、その本質的な特徴として、はらまれている。奥田の連語論は、歴史的に形成された、連語にさしだされている人間のさまざまな動作を、具体的なものから、抽象的なものへと、その発展に沿って、体系化しているのである。」（須田2005：123）として、現代語を知るうえでも、その背景にある通時的な変化、歴史的な発展をふまえることの重要性を指摘している。

「はたく」の多義についての先行研究をまとめた本節の最後に、現代では失われた「はたく」の意味について述べる。日本国語大辞典では、「はたく」の1番目の意味（「1」の項）として「搗(つ)く。砕く。搗き砕く。砕いて粉末にする。粉にする。」を立て、次の例を挙げる<sup>3</sup>。

3 本稿、5節の通時的調査で筆者が使用した資料には「料理物語」「日本新永代蔵」とも含まれない。また、日本国語大辞典の「1」の項では、最も古い例として、室町時代の国語辞典「運歩色葉集」(1548年)に「はたく」が採録されていたことが示されているが、後述するように、通時的調査で筆者が使用した資料に江戸時代より前の例は出てこず、室町時代の使用例について、本稿では明らかにできない。

- (2) さき餅 うるの米上白にして、よくこにはたき (1643年：料理物語，日本国語大辞典)  
 (3) 扱其枯たる櫛 (しきみ) を，抹香にはたかせて (1713年：日本新永代蔵，同上)

その他，現代語にない意味としては「しくじる。失敗する。やりそこなう。損する。また，不評を蒙る。」「値切る。値段を安くさせる。まけさせる。」，そして「口をはたく」という決まった表現での「口に出す。吐く。ほざく。ぬかす。」が拳がっている<sup>4</sup>。

## 2.2 本稿の依拠する理論的枠組み

上記の未解明の点のうち，〈あ〉と〈い〉を明らかにする際に本稿が依拠する枠組みについて述べる。

単語（動詞）の多義のあり方に関する論考として，奥田（1967）がある。単語（動詞）の語彙的な意味を規定するにあたり，「単語の語彙的な意味が実現する諸条件を一般化して，そのあり方を型にわけておきたいとおもうのである」（p.4）とし，まず，多義語において様々な意味が派生していく出発点となる基本的な意味を「自由な意味」と呼び，ある一定の条件のもとに実現する意味，派生的な意味を「しぼられた意味」とする。そのうえで，多義が実現する条件として「連語の構造にしぼられた意味」「文のなかではたす機能にしぼられた意味」「慣用句にしぼられた意味」「形態的にしぼられたもの（意味）」を挙げる。たとえば，動詞「みる」について，「視覚で対象を捉える」という意味が「自由な意味」であり，視覚で捉える対象を示すヲ格名詞（「手」「山」などの具体物や「雪」などの現象）とくみあわさる。それに対し，「文三の顔を天井にみる」の例のような「みる」がもつ「発見」の意味は，対象のありかを示すニ格名詞を伴い「…に…をみる」という連語（単語と単語のくみあわせ）の構造に入るという条件の下で実現する。これを「連語の構造にしぼられた意味」としている。つまり，単語と単語のくみあわせの構造が，多義語の意味が実現する条件として重要なのである。

動詞の意味は，名詞をはじめとしてどのような単語とくみあわさるかによって表される。先に挙げた「みる」と同様，たとえば「あげる」の多義は，どのような名詞とくみあわさるか，連語の構造によって実現する。

- |   |             |                  |                   |       |
|---|-------------|------------------|-------------------|-------|
| A | たなに本をあげる    | 【名詞(具体物)ニ<br>附着先 | 名詞(具体物)ヲ<br>附着の対象 | 附着動詞】 |
| B | 一郎にくだものをあげる | 【名詞(人)ニ<br>授受の相手 | 名詞(具体物)ヲ<br>授受の対象 | 授受動詞】 |

奥田（1976）によれば，このような，単語が持つ，ほかの単語とむすびつく能力は，「みずからの語彙的な意味を具体化するために」「構文的なむすびつきのなかであかるみにて

4 その他，角川古語大辞典をはじめ主要な古語辞典，江戸語辞典を参照したが，おおむね同様の，あるいは，日本国語大辞典より少ない項目数であり，日本国語大辞典の記述で網羅されていると考えてよい。

てくる、単語の語彙的な意味の質的な特徴」(p.73) であり、「結合価valence」と呼ばれる<sup>5</sup>。単語がもつ結合価を基盤として、単語と単語のくみあわせの型として一般化されたものが連語の構造であり、Aは「とりつけの構造」(付着の構造)、Bは「やりもらいの構造」(授受の構造)と呼ぶことができる。

一方で、「連語の構造」として一般化された単語と単語、特に、動詞と名詞のくみあわせは、連語の構成要素である単語から独立した言語の単位であると奥田(1976)は言う。連語の構造は、構成要素の単語の結合価を基盤としながらも、単語の結合価に還元できない。その根拠として、奥田(1976:77)は、次のような例を挙げる。

C 卵をわる	【名詞(具体物)ヲ	対象変化動詞】	
	変化の対象		
D 皿に卵をわる	【名詞(具体物)ニ	名詞(具体物)ヲ	付着動詞】
	付着先	付着の対象	

通常、動詞「わる」は、「力を加えて具体物の形状を変え、いくつかの部分に分ける」ことを表し、具体物を表すヲ格名詞とむすびつく結合価をもち、「もようがえ(対象変化)の構造」の構成要素となる。しかし、ひとたび「とりつけ(付着)の構造」の構成要素となると、臨時的に「わる」が「わって入れる」という意味を帯びるようになる。

また、先の「あげる」の多義を支える連語の構造で示した通り、名詞の語彙的な意味のタイプ、たとえば、ヲ格名詞が「具体物」を表す名詞なのか「人」を表す名詞なのかの違いは、連語の構造を規定する際に重要な役割をもつ。同様に、「わる」という動詞は「物の状態を変える」ことを表す動詞であるがゆえに、「もようがえ(対象変化)の構造」の構成要素となるのである。奥田(1976)は、「ある単語がほかの単語とくみあわさって、構造的なむすびつきをつくるのは、その語彙的な意味の全体においてではなく、そのカテゴリカルな意味においてである」(p.79)とする。奥田のいう「カテゴリカルな意味」は、早津(2022)によれば、次のように規定できる。

「語彙的な意味の異なる複数の単語が同じ文法的(構文論的・形態論的)な性質を示すことがある。その時それらの単語の語彙的な意味のうちには共通する一般的な側面があってそれがその単語群の文法的性質を生み出し支えていると考えられる。同じ文法的な性質を示す単語群の語彙的な意味の中に共通にみいだせる一般的な側面をカテゴリカルな意味という。」(p.58)。

連語の構造に即して例を挙げれば、「皿をわる」「紙を切る」「さんまを焼く」「髪をたばねる」は、名詞、動詞の語彙的な意味が異なるが、連語の構造という面から名詞のほうは「具体物」という共通の側面、動詞のほうは「物の状態を変える」という共通の側面があり、それがカテゴリカルな意味である。そして、そのカテゴリカルな意味は、「もようがえ(対

5 ここでは動詞の結合価のみに焦点を当てて説明したが、奥田は名詞の結合価を否定しているわけではなく「連語はいくつかの構成要素のvalenceの《あい性》のうえに成立する」(奥田1976:74)とする。

象変化)の構造」の一部であるといえる<sup>6</sup>。

### 2.3 ヲ格名詞（具体物）と動詞の連語の体系

連語の構造は、有限の型が、独立していながらおたがいに関係しあうという体系をなしている。この点について、本稿の分析対象である動詞「はたく」と直接かかわる、ヲ格名詞と動詞とのくみあわせのうち、「物にたいするはたらきかけ」の連語の体系について具体的にまとめる。まとめるにあたって、奥田自身の著作である奥田（1968-72）のほかに、早津（2022）を参照した。

まず、ヲ格名詞と動詞とのくみあわせのうち、「物にたいするはたらきかけ」の連語は、次の6つである。【 】が連語の構造の構成要素となる名詞、動詞、およびそのカテゴリカルな意味、【 】の下、2段目が名詞の文法的な意味である。【 】内の（ ）は、特徴的であるが、構成要素として必須ではないものである（早津2022：67-68をもとに作成）。

もようがえ（対象変化） 【具体物ヲ（具体物デ）（～ク／ニ）対象変化動詞】 変化の対象 手段 結果の状態 例：紙を鉄で半分切る、布を赤く染める
とりつけ（付着） 【具体物ヲ 具体物ニ 付着動詞】 付着の対象 付着先 例：切手を封筒に貼る、壁に絵をかける
とりはずし（除去） 【具体物カラ 具体物ヲ 除去動詞】 【具体物ノ 具体物ヲ 除去動詞】 除去元 除去の対象 例：溶液から不純物をとりのぞく、壁の絵をはがす
うつしかえ（対象移動） 【具体物ヲ 空間カラ 空間ニ／へ／マデ 対象移動動詞】 移動の対象 移動前の場所 移動後の場所 例：野菜を畑から駅まで運ぶ、机を2階に上げる
ふれあい（接触） 【（具体物デ） 具体物ヲ 接触動詞】 手段 接触の対象 例：両手で壺をなでる、鉛筆で机をたたく
結果的 【（具体物デ／カラ）（空間ニ） 具体物ヲ 生産動詞】 原材料 出現場所 生産物 例：竹でざるを編む、駿府に城を築く

このうち、主に動詞「はたく」がかかわるのは、「とりつけ（付着）」「とりはずし（除去）」

6 本節と同様の理論的枠組みにもとづき多義を分析している先行研究に茶谷（2023）があり、本稿でも参考にした。

「ふれあい（接触）」の構造である。

奥田(1968-72)では、以上の6つの連語の構造を認めたうえで、その相互のかかわりあい、移行関係を詳細に論じている。具体的には、4節において多義の記述を行なう際に、必要に応じて引用する。

以上をふまえて「はたく」の実例調査を行ない、2.1節で述べた<あ>から<う>の3つの点を明らかにする。

### 3. 調査方法

現代語の実例収集は、国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」を用いる。通時的な実例収集は、同研究所「日本語歴史コーパス (CHJ)」を主に使用し、追加資料としてジャパンナレッジ版 小学館「新編日本古典文学全集」を使用する。以下、詳細を記す。

#### 3.1 現代語調査の方法

現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) は、1976年から2005年 (メインとなる書籍の場合は1986年から2005年) の「書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律」などの1億430万語のデータを格納している現代日本語書き言葉のコーパスである。同コーパス検索用アプリケーション「中納言」を使い、すべての期間、ジャンルを対象に「短単位」, 「語彙素読み=ハタク」かつ「語彙素=叩く」で検索した。ヒットした実例172例から、誤ってタグづけされたと思われる例6例, メタ言語的な説明の対象として挙がっている例2例, 文語の例2例を除外し、162例を得た。表記について、得られた実例はすべてひらがな表記であった。これは、動詞「はたく」も「たたく」も漢字表記が「叩く」となり、コーパスのタグづけ段階で「叩く」という漢字表記の動詞はすべて「たたく」として扱われタグづけされた結果だと考えられる<sup>7</sup>。つまり、漢字表記の「はたく=叩く」は今回の調査では分析できないことになる。「叩く」の漢字で書かれる動詞が「はたく」か「たたく」かは判断不可能であり、現在の日本語の表記上、どうすることもできない。

複合動詞前要素となる場合 (「はたきこむ」「はたきおとす」など) は別の動詞であるとみなし、分析対象としていない。複合動詞前要素が「はたき」となる例のうち、複合動詞後要素が局面動詞 (「はじめる」「おわる」「つづける」) となる例は見られなかった。また、「はたく」が後要素になる複合動詞も見られなかった。

#### 3.2 通時的調査の方法

日本語歴史コーパス (CHJ) は、「奈良時代編」「平安時代編」「鎌倉時代編」「室町時代編」「江戸時代編」「明治・大正編」「和歌集編」からなる。前述のBCCWJ同様、すべての時代、作品を対象に「短単位」, 「語彙素読み=ハタク」かつ「語彙素=叩く」で検索した。実例はすべて「江戸時代編」と「明治・大正編」のものだった。なお、「江戸時代編」は「I

7 たとえば、「大金を叩いて」などの例もすべて「たたく」としてタグづけされている。

洒落本／Ⅱ人情本／Ⅲ近松浄瑠璃／Ⅳ随筆・紀行」からなり、「明治・大正編」は「Ⅰ雑誌／Ⅱ教科書／Ⅲ明治初期口語資料／Ⅳ近代小説／Ⅴ新聞／Ⅵ落語SP盤」からなる。実例数は、39例であった。こちらもBCCWJ同様、漢字表記の問題が生じる。今回の調査対象は、ひらがな表記の例のみとし、仮に「はたく」としてタグがついていたとしても、漢字表記の例は除外した。具体的には、「たたく」の可能性もある「叩」「撲」、「はらいて」の可能性もある「拂（払）いて」の例である。こちらも、複合動詞の要素の例は除外した。

これだけでは実例の数が十分でないため、それを補うべく、ジャパンナレッジ版の小学館「新編日本古典文学全集」から実例を収集した。「古典本文」から部分一致検索で、「はたか」「はたき」「はたく」「はたけ」「はたこ」「はたい」「はたひ」で検索した。そこから、動詞「はたく」ではないものと、日本語歴史コーパス（CHJ）と重複する7例を除外し、16例を得た。16例はすべて、江戸時代のものであった。合計すると、江戸時代と明治大正期の実例、55例が分析対象である。

#### 4. 実例分析—現代語—

以下、現代語の「はたく」の多義とそれを支える構造を分析する。

##### <1>接触の構造

【具体物ヲ 対象	（具体物デ） 道具	（情態副詞） 動作の様態	ハタク】
-------------	--------------	-----------------	------

- (4) 涛子は「やけ食いしたら、後悔するで」と言いながら、クッキーに手を伸ばした。渚がピシャリとその手をはたく。「アカン！みんな、あたしが食べんねから。どうせあたしなんか、相手にされてへんね。いっぱい食べて太ってやる！」（やんちゃくれ）
- (5) 1敗の黒海と豪風の一番は、黒海が何かこわごわ立った感じで、低く出てくる豪風をすぐにはたいたが、ついてこられた。2敗。（Yahoo!ブログ）
- (6) 「なにかあったのか！ 窓を開けたら、妙な声が聞こえた」 やっと起き上がった淵野辺はベッドにはいる直前だったらしく、パジャマの上に厚手のレザーコートをはっかけた。雪まみれのコートを神経質にばたばたはたいた。足元もスリッパだから、寒いにちがいない。見る間に唇が青くなってきた。（風雪殺人警報）
- (7) 釣竿の男たちはわめき、ののしり、周りの男たちはけしかけた。太い腕の筋肉は盛り上がり、首筋や額の静脈が飛び出た。二人の男はうめき、手足をばたばたさせて持ち堪え、繰り返し竿を引いてはリールを巻いた。汗がだらだら流れ、それが目に入らないように、アープが白い布巾で顔をはたいた。（闇の囁き）

まず、「接触の構造」での「はたく」である。この場合、「物に触れて、物にたいして打撃を与える」という意味である。（以下、この意味を<接触・打撃>と呼ぶ。先行研究の<打撃>とほぼ一致する<sup>8</sup>。）該当する実例は58例であり、この意味の例が最も多い。

この、最も実例数が多いという事実と、本節で後述する連語の構造の移行関係、次節で

8 相違点として、例（5）のような相撲の例は、国語辞典や先行研究では別義とされることが多いが、別義とするだけの十分な言語的根拠がないため、<接触・打撃>の意味とする。

述べる通時的な調査の結果から、この〈接触・打撃〉が、現代語の動詞「はたく」の多義の体系における、基本的な意味、「自由な意味」といえる<sup>9</sup>。

ヲ格名詞は、「体」「頭」「手」「尻」などの身体部位が28例、「孫」「力士」など人<sup>10</sup>が5例、「シャツ」「帽子」など身につけるものが8例、「きせる」「テーブルクロス」「財布の底」などその他具体物などが17例だった（単文レベルで明示されていないものを含む）。圧倒的に体やその延長としての身につけているものが多い。この点が「たたく」などの類義語と「はたく」との大きな違いである。

必須の要素以外では、「布巾で」「竹べらで」など道具のデ格名詞を伴う例が4例見られた。また「パンパンと」「ぱしっと」「ぴしゃりと」など情態副詞を伴う例が18例見られた。奥田（1968-72）、早津（2022）には言及がないが、これも重要な特徴といえる。特に、必須の要素としてヲ格名詞のみをとることは「対象変化の構造」と一見同じように見えるが、対象変化の構造では変化の結果の状態を表すニ格名詞、形容詞連用形などが入りうるのに対し、接触の構造ではそれが不可能であり、その代わりに、接触という動作そのものの様態を表す副詞が入るのである。

「ふれあい（※引用者注＝接触）のむすびつきをあらわす連語では、を格の名詞でしめされる物へのはたらきかけが、なんの変化もよびおこさないで、たんなる接触あるいは把握におわっている。」（奥田1968-72：36）とされるように、接触の構造での「はたく」は、対象への接触・打撃の意味となり、対象を変化・付着・除去・移動させる意味は積極的に表さない。しかし、動作主が動作をする意図は、例（4）のような「制止」という意志の伝達、例（5）のような攻撃、例（6）（7）のような付着物（雪や汗）を除去することなど、様々である。特に、例（6）（7）のような例からは、後述する〈除去〉の意味とのつながりをみいだすことができる。

また、例（8）も〈接触・打撃〉だが、臨時的な換喩表現として、「支払いに有金をすべて使う」のような意味がよみとれる。この種の例からは、後述の〈（金を）使い果たす〉の意味とのつながりをみいだすことができる。

- (8) その夜は神戸駅で寝て、翌朝、闇屋の売るコッペパンを一個、財布の底をはたいて買って、歩き出した。すると突然、目の前に巨大な金網に囲まれた建物が現われた。（うそりやま考）

9 前掲の奥田（1967）は、いくつかの多義から、どのような手順・方法で、基本義である「自由な意味」を選択できるか、はっきりと述べていない。動詞「みる」のように直観的、内省的に基本義が明らかだと考えられる動詞もあるが、すべての動詞がそうではない。また、ここでいう「自由な意味」とは文から離れて実現する意味ということでは、おそらくないだろう。奥田自身が言うように、単語（動詞）は、他の単語（名詞）とむすびついてその意味を具体化する。筆者は、「自由な意味」を、連語の構造の移行関係、実例数（トークン頻度）の多寡、歴史的な意味の発生順などから、総合的に判断されるものとする。

10 この場合の「人」は、「人に物をあげる」「人を説得する」などと違い、人格をもって、やりとりをしたりする社会的な存在としての人ではなく、あくまで物扱いであるため、具体物相当とみなせる。

## &lt; 2 &gt; 除去の構造

【具体物カラ 除去元	具体物ヲ 除去の対象	ハタク】
【具体物ノ 除去元	具体物ヲ 除去の対象	ハタク】

「除去の構造」では、「接触の構造」と異なり、「除去元」となる具体物を表すカラ格またはノ格名詞が構造の構成要素として必須となる。この場合、「物に触れ打撃を与えることで、物に付着する物をとりのぞく」(以下、<除去>)という意味を表す。

- (9) 「どういいういきさつだったんだ、キンバリー？」彼女は黒っぽい粒々を脚からはたき、なかばうわの空でクリントをゆさぶった。(シミソラ)
- (10) 私はテーブルの下から出て、立ち上がった。蘭子が警官たちに明かりを点けてくれるよう頼んだ。私は膝の汚れをはたきながら言った。(人狼城の恐怖)
- (11) 姉さんかぶりを取って、手の土をはたきながら近づいて、お辞儀をした。(はちまん)

<除去>の例は、13例見られた。除去の対象であるヲ格名詞は、先行研究の指摘通り、「粉」「雪」「ほこり」「土」など粉状のものが多数を占める(「尻/膝の汚れ」を土汚れで粉状のもののみなせば、13例中12例が該当)。それが、「とる」「のぞく」などの類義語と<除去>の意味での「はたく」との違いである。また、除去元は、「脚」「膝」「コート」など身体、または身体の延長としての身につけているものの場合と、「肉」「豆腐」「型」など料理の食材・器具の場合が見られた。

実例には、単文中に除去元となるカラ格名詞・ノ格名詞が明示されない例も多い。しかし、前後の文脈から明らかなために省略されたにすぎず、連語の構造としては「除去の構造」である。例(12)は、料理の手順を示す内容だが、前後の文脈であきらかな除去元＝「豆腐」が省略されている。

- (12) 豆腐を3センチ角の、やっこに切り、1個ずつ小麦粉をたっぷりと、まぶし、余分な粉をはたく。百七十度の油で豆腐をフライ返しに載せて油の中に入れ、キツネ色になるまで揚げて油を切る。(Yahoo!知恵袋)

## &lt; 3 &gt; 付着の構造

【具体物ヲ 付着の対象	具体物ニ 付着先	ハタク】
----------------	-------------	------

佐藤(2018)、中道(2019)が指摘するように、「物に物を接触させて、くっつける」(以下、<付着>)意味がある。その意味を支える連語の構造は「付着の構造」である。

これに該当する例は、24例であった。実例数としては<接触・打撃>の次に多い。

- (13) 「まあ、ぼうや、」と、髪に粉をはたいた王女様はいいました。「あなた、ほんとにわけをご存じないの？なぜかというね、(フランダースの犬、例(1)再掲)
- (14) お肉に軽く塩こしょうをして小麦粉を薄くはたいておきます。(Yahoo!知恵袋)

先行研究の指摘通り、付着の対象のヲ格名詞は、「粉」「パウダー」「小麦粉」など粉状のものが多数を占める（24例中23例）。付着先のニ格名詞は、「顔」などの身体部位の場合と、「肉」などの料理の食材の場合が見られた。それが「つける」などの類義語と比べた時の<付着>の意味の「はたく」の特徴といえる。また、実例では、化粧・スキンケアと料理の内容に限られた。

<除去>と同様、実例の中には、単文中に付着先のニ格名詞が明示されない例も多い。しかし、これも、前後の文脈から明らかな場合は省略されたにすぎず、連語の構造としては「付着の構造」である。特に、<付着>の構造のうち、例（15）のように付着先が「顔」など身体部位の場合、「(体に) 服を着る」「(手に) 指輪をはめる」など同様に再帰的であり、このような場合、付着先は省略されやすい傾向がある（片山2005：325）。

(15) 化粧直しは、脂をとって、パウダーをはたいてから同じようにファンデをぬる。  
(Yahoo!知恵袋)<sup>11</sup>

以上、「はたく」の多義のうち、<接触・打撃>、<除去>、<付着>を見てきた。以下、これら3者の関係を、連語の構造の点から述べる。

まず、「接触の構造」について、奥田（1968-72）は次のように述べている。

「ふれあいのむすびつき（※引用者注＝接触の構造）はほかのカテゴリーとの複雑な相互関係をもっているだろう。ふれあいのむすびつきをあらわす連語は、物にたいするはたらきかけの全過程のうちから、接触の段階あるいは側面をぬきだして、名づけているのだから、物にはたらきかけて、変化させる<sup>12</sup>ことをあらわす、すべての連語と直接的に関係をもっていなければならないのである。なかでも、このむすびつきは、接触というおなじ現実の現象を表現するために、とりつけのむすびつきとはごくあたりまえに相互移行をおこなっている。」（p.37）

その上で、「顔をさす」と「針を体にさす」、「喉をつく」と「壁に片手をつく」などの例を挙げる。本稿で述べている「はたく」における<接触・打撃>の意味と<付着>の意味との間に見られる関係は、連語の構造として、他の動詞にも広く一般的に起こるのである。

また、奥田（1968-72）には述べられていないのだが、「接触の構造」と「除去の構造」の間にも、「接触の構造」と「付着の構造」の間にみられるのと同じように「接触というおなじ現実の現象を表現する」ことによる、相互移行がみられるのではないだろうか。たとえば、次のような動詞である。

「額をぬぐう」と「額から／の汗をぬぐう」

「包装紙をなめる」と「包装紙のクリームをなめる」

11 補足して言えば、後続の「ファンデをぬる」も同様に、再帰的な付着の構造となっている。

12 この「変化」は「対象変化の構造」という意味ではなく、付着や除去なども含めてのことだと考えられる。

「すそをはらう」と「すそのほこりをはらう」  
 「パンをかじる」と「パンのレーズンをかじる」

奥田は言及していないのだが、このように考えれば、「接触の構造」を中心として、一方で「除去の構造」、もう一方で「付着の構造」に移行することによって、＜接触・打撃＞から、＜付着＞、＜除去＞の意味へと派生したという捉え方ができるのではないだろうか。

一方で、奥田（1968-72）は、動詞「とる」について、「腰から手ぬぐいをとる」と「小桶に湯をとる」の例を挙げて、「とりはずし（※引用者注＝除去）動詞の代表であるとするが、とりつけのむすびつき（※引用者注＝付着の構造）をもつくる能力をもっているという事実は、とりはずしととりつけとのふたつのカテゴリーがとなりあっていることをものがたっている」（pp32-33、下線は引用者）とも述べている。このように「連語の構造」から、「はたく」が、＜付着＞、＜除去＞両方の意味を持つに至ったことを説明できる。

#### ＜4＞機能にしばられた意味

次のような例での意味である。

- (16) 中国五金鋳産公司ロサンゼルス支社は、数年前にデトロイト市工業地区の近くにある大きな未開発地を、約千万ドルの大金をはたいて購入した。（十二億人市場を狙え）  
 (17) だが、弦を張ったとたん、その張力で弦の元にある枕（ブリッジ）が飛んでしまった。大枚をはたいて買ったウクレレは、一瞬にして見るも無残な姿に変わり果てた。（パーボン・ストリート・ブルース）

意味としては、＜（金を）使い果たす＞であり、ヲ格名詞は、すべて「大金／大枚／有金／貯金」など金に関する名詞である。

現代語においては、この意味の多くの例（61例中、39例）が「…をはたいて買った／購入した／弁償した」と、テ形の形をとり、後ろに動詞を伴う。これがこの意味が実現する典型的な構文的条件といえ、奥田（1967）のいう「動詞が文のなかでどのような機能をはたしているか」と密接にかかわる「機能にしばられた意味」といえる。

また、この意味は、前述の通り、＜接触＞の意味の「はたく」の臨時的、換喩的な使用から生まれたと説明できる。

#### ＜5＞その他、位置づけが難しいもの

ごく少数だが、ヲ格名詞で表される具体物を空間的に移動させることを表すと思われる例もみられる。

- (18) 長友がスローインを入れて戻して、逆サイドの内田へ。内田はポストの李へ。李はスルー。森本が触って香川へはたく。香川が決めて同点。綺麗な連携。本番に取って置きたいようなファインゴール。（Yahoo!ブログ）

合計6例見られたが、出典としては2つの資料のみであり、ともにサッカーについての内容である。位相の面でサッカーの専門語と考えられる。

意味的にはボールを移動させることを表しているようだが、二格／へ格名詞が人である点で、「対象移動の構造」とも言い難く、むしろ前述の「あげる」と同様「授受の構造」とも言える。現段階ではこれ以上の分析はできず、多義の1つとして定着、確立しているとはまでは言えない。本稿では、こういった例の存在を確認するにとどめる。

## 5. 実例分析—通時的調査—

### 5.1 江戸時代

以下、江戸時代の資料にみられる実例の調査を行なう。必要に応じて適宜ジャパンナレッジ版「新編日本古典文学全集」の注釈と現代語訳を参照した。実例数は、CHJから11例、ジャパンナレッジ版「新編日本古典文学全集」から16例、合計27例である。

結論を先どりして言えば、次のように言える。

最初の実例は17世紀の半ばで、そこから18世紀の終わりころまで<対象変化>の例がみられる。18世紀の終わりから<対象変化>が<接触>にとってかわられ、また、<除去>の例がごく少数だが見られ始めるようになる。<付着>の例は、まだない。

以下、詳しくみていく。

<1>対象変化の構造	【具体物ヲ 変化の対象	(具体物二) 結果の状態	ハタク】
------------	----------------	-----------------	------

<対象変化>の意味と判断できる実例である。連語の「対象変化の構造」の必須要素とは言えないが、「粉(こ)に」などの変化の結果の状態を表す具体物の二格名詞を伴う。2.1節で挙げた日本国語大辞典の例を再掲する。

- (19) ささ餅 うるの米上白にして、よくこにはたき (1643年：料理物語、例 (2) 再掲)  
(20) 扱其枯たる糍(しきみ)を、抹香にはたかせて (1713年：日本新永代蔵、例 (3) 再掲)

今回の筆者の調査では、合計8例の実例が該当するが、典型的な対象変化の例は、次の1例のみだった。クジラに関する内容である。例 (19) から (21) は、「物を粉々に砕く」という意味だと言える。

- (21) 日本古典文学全集山なき浦に珍しく、雪の富士、紅葉の高雄ここにうつしぬ。いつとても捨て置く骨を源内もらひ置きて、これをはたかせ、又油をとりけるに、思ひの外なる徳より分限になり、(1688年：新編日本古典文学全集・日本永代蔵)

例 (21) 以外の7例は、すべて近松門左衛門の実例で、変化の対象のヲ格名詞が人の名前、「身」、「体」、「心」、結果の状態の二格名詞が「粉」であった。実際に人間の体などを粉々にするわけでないで、隠喩的な使用と考えられる。

- (22) この身になつた半七を、粉にはたいても一分一つ誰が貸さう (1712年：CHJ・近松)

## &lt; 2 &gt; 接触の構造

【具体物ヲ 接触の対象	ハタク】
----------------	------

接触の構造で、現代語に通じる<接触・打撃>の意味の例は、18世紀の終わりから、11例見られた。接触の対象となる具体物を表すヲ格名詞は、「きせる／たばこ」が8例を占める。実例中には、道具のデ格名詞、情態副詞を伴う例は見られなかった。

- (23) ひとりのにほんざしくわへぎせるをはたいて里風あれ／＼みさつせへ。(1787年：CHJ・洒落本)

なお、すべて「東海道中膝栗毛」の例だが、「智恵袋のそこをはたく」「たばこ入のそこをはたく」と、<接触・打撃>の「はたく」が臨時的に、隠喩または換喩として使われた例が3例見られた。例(24)、「智恵袋のそこをはたきて」の注に「工夫に知恵のあるだけを出して」とある。例(25)、「たばこ入のそこをはたく」に注はないが、文脈から「することがなくて、たばこを吸い続ける、吸い尽くす」という意味がよみとれる。4節でのべたように、これらの例は<使い果たす>という意味につながる。

- (24) 夫より木曾街道筋帰路の滑稽等 追々作者の根かぎり智恵袋のそこをはたきて年々出板差出候、(1802～1804年：新編日本古典文学全集・東海道中膝栗毛)
- (25) ちやわんを出しもつてくふうち だし合の米なれば弥二郎きた八はたゞ見ているばかり 手もちなくてたばこ入のそこをはたく 六部はやがてくひしまいて(1802～1804年：新編日本古典文学全集・東海道中膝栗毛)

## &lt; 3 &gt; 除去の構造

【具体物ノ 除去元	具体物ヲ 除去の対象	ハタク】
--------------	---------------	------

<除去>の例は、3例見られた。初出は、<接触・打撃>と同じ18世紀の終わりだが、まだ江戸時代には実例数が少ないことから、<接触・打撃>の意味が先に生じ、その後、明治期以降、徐々に定着していったものと考えられる。ヲ格名詞は、「(たばこの) ふきがら」, 「(きせるの) ほこり」であった。

- (26) したゆへ、急にをきられもせず ウゝ、フウ／＼ [琴] 又もしい／＼と、気がつきてそこらを見れば、今はたいた**烟艸の**ふきがらが、火入の中にまだけむつて居るゆへ、(1790年：新編日本古典文学全集・洒落本)
- (27) トけしずみの火をかきさがし、灰のたつをもかまはず、あふぎたてる。此うちふたりは**ほこりを**はたき／＼、たばこのみいると、六十ぐらいのかつばをきて(1802～1804年：新編日本古典文学全集・東海道中膝栗毛)

本節冒頭で述べた通り、結論として、江戸時代に、<対象変化>の後、<接触・打撃>の例が現れ、さらに、少数だが<除去>の例が現れはじめたとと言える。

ただ、現代語ではなくなってしまった<対象変化>から<接触・打撃>の意味が生まれ

た過程は、実例数が少ないことから明らかにすることができない。また、連語の構造の面から「対象変化の構造」から「接触の構造」への移行についての言及は奥田の論考にもない。

このほか、4節で、〈(金を)使い果たす〉の意味としたものに該当する例は、1例見られた(「有金をはたく」の例)。

また、「目をはたく」(目をあけるの意)、「業恥をはたく」(大恥・赤恥をかくの意)の例が1例ずつ見られたが、臨時的な使用か、多義として定着していたかどうかは判断できない。また、日本国語大辞典に立項されている「失敗する」の意味の例、「ほごく」の意味の「口をはたく」の例が各1例見られたが、これだけでは他の意味との関係を明らかにすることはできない。

## 5.2 明治・大正期

明治・大正期の事例は、28例である。ほぼ江戸時代後期と変わらず、全28例中、〈接触〉が19例であり、その中で、ヲ格名詞は「キセル」がほとんどで、現代語に多く見られる身体部位は1例のみであった。〈接触〉の意味の「はたく」のうち、「財布／知識／思案の底をはたく」という臨時的で、換喩または隠喩の使用例が4例見られた。〈除去〉は5例で、「手の塵をはたく」「巻たばこの灰をはたく」などの例が見られた。〈付着〉の例は見られなかった。

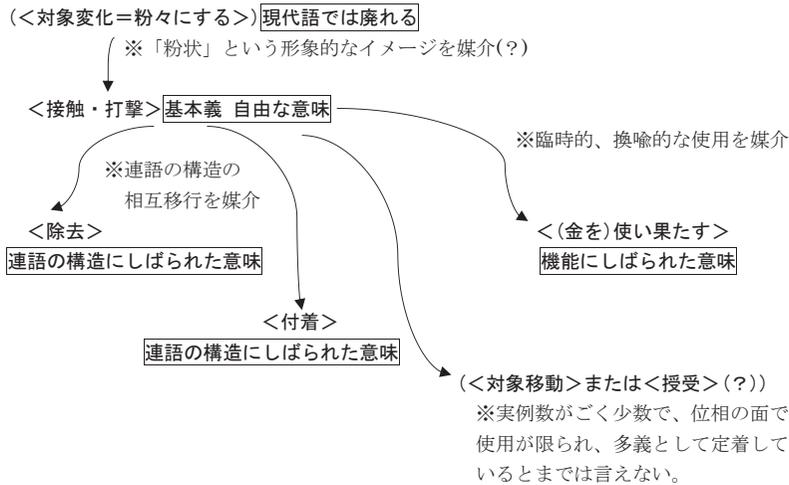
このほか、4節で、〈(金を)使い果たす〉の意味としたものに該当する例が1例見られた(「財産をはたく」)。また、文意が不明で分類できない例や1例のみのやや特殊な例が3例見られた。

以下、4節と重複するので詳細は割愛するが、実例をいくつか挙げる。

- (28) 〈接触・打撃〉其言葉のいかにも用有り氣なるに、吾は吸ひかけたる煙管をはたきて膝進ませ、何事にもあれわが身にふさはしからば、頼まれ参らすべし、語り給へ。と云へば、(1895年：CHJ・明治・昭君怨)
- (29) 〈接触・打撃(臨時的、隠喩)〉小さな愛郷者は、負けぬ氣になつて、高鞍山だの、大川だの、延年寺だの、田の虫追の賑合だの、智識の底をはたいて争つて見たが、駄目駄目、(1900年：CHJ・明治・思出の記)
- (30) 〈除去〉通り一遍の事を云ふと、預り物を葉子に渡して、手の塵をはたかんばかりにすぎなく、眞先きに舷梯を降りて行つた。葉子はちらつと叔母の後姿を見送つて驚いた、(1911年：CHJ・明治・或る女)

## 6. 結論

4節、5節の分析結果から、動詞「はたく」の主要な多義の体系を図示すれば、次のようになる。



図：動詞「はたく」の多義の体系

通時的な変化のうち、＜対象変化＞の実例が少ないことによる分析の不十分さから、どのように＜対象変化＞から＜接触・打撃＞が生じたかのミッシングリンクを解明するには至らなかった。推測の域を出ないが、強いて言えば、「粉状」のものがかわるという点が共通しており、その形象的なイメージを媒介としている可能性がある。(さらに言えば、その「粉状」のものがかわるという点は、現代語の他の意味でも引き継がれる。)

本稿の議論から、多義動詞の分析・記述の1つのケーススタディとして、次の点を明らかにすることができた。

- ①多義が実現する言語的条件を明らかにすることの重要性
- ②奥田の連語論が、分析・記述の枠組みとして、有効であること
- ③通時的な変化をふまえることの重要性

言語研究の目的の1つは、社会的慣習として話者の間で共有される言語の「構造」「型」を明らかにすることである。単語の多義の記述は、そういった「構造」「型」に立脚し、意味を掬いとっていくことが重要である。

#### 参考文献

- 奥田靖雄 (1967) 「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8, 教育科学研究会国語部会. [奥田1984に所収, pp.3-20]
- 奥田靖雄 (1968-1972) 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28 [言語学研究会 編1983に所収, pp21-149.]
- 奥田靖雄 (1976) 「言語の単位としての連語」『教育国語』45 [奥田1984に所収, pp.67-84.]
- 奥田靖雄 (1984) 『ことばの研究・序説』むぎ書房.
- 片山きよみ (2005) 「日本語他動詞の再帰的用法について」『ありあけ 熊本大学言語学論集』4, pp.325-369.

- 国広哲弥 (1994) 「認知的多義論—現象素の提唱—」『言語研究』106, 日本言語学会, pp.22-44.  
言語学研究会 編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房.  
佐藤那菜 (2018) 「「はたく」について」『大東文化大学外国語学会誌』48, pp. 84-101.  
須田義治 (2005) 「連語論と動詞の意味的な分類」『国文学解釈と鑑賞』70-7, 至文堂, pp.121-129.  
茶谷恭代 (2023) 「動詞「つかむ」の多義の記述—連語の構造的なタイプをてがかりに—」『東アジア国際言語研究』5, 東アジア国際言語学会, pp.155-175.  
中道知子 (2019) 「日本語動詞「はたく」の意味・用法—「現象素」による解釈—」『大東文化大学紀要 (人文科学)』57, pp.13-21.  
中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義 編 (1994) 「はたく」『角川古語大辞典』4巻, 角川書店, p.1076.  
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 編 (2000-2002) 「はたく」『日本国語大辞典 第二版』小学館, ジャパンナレッジ版.  
早津恵美子 (2022) 「「カテゴリカルな意味」をめぐって—奥田靖雄の連語論とカテゴリカルな意味」  
斎藤倫明・修徳健 編『語彙論と文法論をつなぐ』ひつじ書房, pp.55-86.

#### コーパス・言語資料

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』国立国語研究所, 中納言 2.7.2データバージョン 2021.03.  
『日本語歴史コーパス (CHJ)』国立国語研究所, 中納言 2.7.2データバージョン 2023.03.  
『新編日本古典文学全集』小学館, 1994-2002. ジャパンナレッジ版.

Analysis of the multiple meanings of the Japanese verb *hataku*  
based on the constructional types of word-combinations

Kenichi Nakayama

This paper aims to describe the multiple meanings of the Japanese verb *hataku* (to slap). We, linguists must clarify the linguistic conditions to realize each meaning of the polysemous word. This paper analyzed the multiple meanings of the verb *hataku* by using mainly two corpora, ‘the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese’ and ‘the Corpus of Historical Japanese’ based on Yasuo Okuda’s theory of the constructions of word-combinations. In conclusion, the verb *hataku* has the following meanings.

- (1) Change of the object (to smash something): Vanished meaning. The verb *hataku* in this meaning was used from the middle of the 17<sup>th</sup> century to the end of 18<sup>th</sup> century.
- (2) Contact (to slap something): The basic meaning, the free meaning (Okuda 1967) in the system of the meanings of *hataku* in modern Japanese.
- (3) Removal (to slap and remove something): The meaning bound by the construction of word-combinations (Okuda *ibid*).
- (4) Adhesion (to slap and stick something): The meaning bound by the construction of word-combinations (Okuda *ibid*).
- (5) To use up money: The meaning bound by the function in the sentence (Okuda *ibid*).